



# 東京多摩プロバスニュース

第 60 号

■事務局：〒206-0034 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方 ■編集・発行：広報委員会 2015. 5. 13.

■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

## 多摩の地域文化を育てよう

### 第 129 回 定例会

日時：平成 27 年 3 月 4 日(水)午後 1 時 30 分より

場所：関戸公民館第 2 学習室

出席者：27 名(会員数 34 名)

### 第 130 回 定例会

日時：平成 27 年 4 月 1 日(水)午後 1 時 30 分より

場所：関戸公民館第 2 学習室

出席者：29 名(会員数 34 名)

### 理 念

1. 豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする

### ◇◇◇ ごあいさつ ◇◇◇

#### 健康について思うこと 鈴木達夫研修・親睦委員長

当クラブのプロバスニュースは、5 月で第 60 号記念の節目を迎えました。その折々の当クラブや会員の活動・テーマに基づいたことを会員が投稿し、2 ヶ月毎に、広報委員会が編集印刷して、会員の皆様・関係するプロバスクラブ・諸機関に配布して好評をいただいています。この 10 年間継続の尽力に謝意と祝意を表したいと思います。



定例会で、永田宗義会員が 3 分間スピーチ「持病との上手な付き合い」を語られ、平田哲郎会員が誕生祝で卒寿を迎えての一言で「後期高齢者で老化は避けられない」と語られ、大変参考になりました。

さて、健康でありたいとの願望は誰も持っています。「後期高齢者」になったら肉体的老化は避けられないが、同時に、高齢者になっていくと若さをどう保つかが課題になります。肉体と心の若さは、一定の努力である程度保てますが、日頃は、あまり頓着せずに意外と不健康な生活を送っているのではないのでしょうか。健康の有難さを実感するのは、何か病気やけがをして思うように活動ができなくなったり、体の痛みを感じたり

した時であります。その時に、多くの方は「ああすればよかった」「こうすればよかった」と後悔するものです。そうならないためには、まだ元気なうちに日頃から健康への努力をすること、とりわけ食事とストレス解消が大切だと思います。

「老いは下半身からやって来る」と言われ、大事なことは下半身の強化です。機会をつかって歩くことを目標にしたい。日常生活の中で心掛けて、メリハリのある毎日を過ごしたいと思います。

清純な花ミズキの街路樹（多摩市鶴牧 6 丁目通り）



◇◇◇ 幹事・委員会報告 ◇◇◇

1. 幹事報告

西村政晃幹事

1.1. 次期体制が決まる

去る3月12日(木)、現任会長・副会長と会長経験者による「有識者会議」で、来年度副会長候補を推薦。引き続き各委員会から選ばれた推薦委員による「推薦委員会」にて、4委員長候補が推薦された。7月1日(水)開催の定期総会で正式に選任される予定である。次期体制は次の通り。

会長:神谷真一、副会長:倉賀野武士、幹事:稲田興

会計:藤寄喬子、総務委員長:鈴木泰弘

研修・親睦委員長:鈴木達夫、地域奉仕委員長:澤雄二

広報委員長:北村克彦、監査:山田正司

1.2. 東京多摩ロータリークラブ主催「俳句と落語」

4月12日(日)第10回多摩市中学生俳句大会を記念したユニークな記念事業が開催され、当クラブより11名が参加し、楽しんだ。落語は金原亭世之介師匠が2席を披露。座談会は世之介師匠に加え、俳人由利雪二先生、阿部裕行多摩市長、清水哲也多摩市教育長等との間で、伝統の俳句と落語について興味深いディスカッションが行われた。

1.3. 西村政晃会員 成城ロータリークラブで卓話

3月10日(火)「食は世界を駆けめぐる」と題して実施。アフリカ原産のコーヒーの樹があちこちで栽培され世界の飲物になったり、インドのカレーがヨーロッパに渡り、そしてわが国へももたらされ、日本の国民食のようになったりと、例を挙げながらの説明。

2. 委員会報告

2.1. 総務委員会

倉賀野武士委員長

1) 4月定例会卓話「今、古典芸能がオモシロイ!」は、青木ひとみ会員が三味線持参で、演奏を交え、扇子や手拭等を使い楽しい話をされ、最後は端唄「奴さん」を全員で唄うなどいつもと一味違った卓話となった。

関連記事P3参照

2) 4月1日(水)高村弘毅会員が熊谷市より市政功労者として表彰された。

3) 5月定例会では、埼玉浮き城プロバスクラブよりの交換卓話を予定。

2.2. 研修・親睦委員会

鈴木達夫委員長

1) 3月31日(火)春の親睦会 貸切の屋形舟によるお花見昼食会は、好天に恵まれ、桜満開の隅田川を参加者18名で楽しみました。 関連記事P4参照

2) 5月28日(木)・29日(金)上高地研修旅行実施予定

2.3. 地域奉仕委員会

森川静子委員長

1) 平成26年度そろばん教室;貝取・愛和・連光寺・多摩第二の4つの小学校で2月から3月にかけて実施したそろばん教室が無事終了した。 関連記事P5参照

2) 平成26年度「傾聴入門講座」が3月7・8日両日開催され、当クラブから5名が受講。今後、会友の方から希望があれば、傾聴に出向き役立てる。

2.4. 広報委員会

稲田興委員長

1) プロバスニュース第60号(5月13日発行)の編集会議を3月20日に実施。編集計画内容を3月25日の理事会で説明・了承を得た。4月1日の定例会で原稿執筆依頼。4月24・28日の編集会議を経て、最終校正を実施。

2) 当クラブのホームページは、プロバスニュース第59号の内容等を反映させ、3月18日に更新し、公開した。



広報委員会の皆さん

◇◇◇ 三分間スピーチ ◇◇◇

1. 孤独死を克服する高齢者の生き方 中村昭夫会員

最近一人身の高齢者の孤独死をよく耳にする。これらのほとんどが世間との付き合いを断絶した人たちである。高齢者はどのように生きたら良いかには様々な見解があるが、人が生きるということは他の人との繋がりで、喜怒哀楽を味わいながらの刺激がなければならぬ。怒哀は減らして、喜楽を沢山求めてゆけば脳は活性化すること。それと高齢者は介護ということで人から与えられることばかり望むのではなく、他の人や地域のために自分ができることを何かしていくことで、他の人たちから「ありがとう」という言葉を貰い、それがもう一つの生きがいとなり脳は活性化する。高齢者は周囲の人たちとの人間関係を強め、加えて奉仕活動を心してゆけば孤独死や認知症からも

解放されていくのであろう。

2. 持病との付き合い

永田宗義会員

50歳直前の定期検診で、糖尿病予備軍と言われ、「ストレス回避・適度の有酸素運動・食の乱れや過食の防止」と指導あり。仕事上逡巡するも2年後に治療を始め23年間、現在は①毎食前に空腹血糖値の測定と即効性インスリン注射、就寝前持効性インスリン注射②精神的ストレス回避とリラックスした心身の維持③毎日3回2万歩を目標にウォーキング④1日の食事を1800kcal目安に規則正しく摂り、間食厳禁に努力中。その結果ヘモグロビン(HbA1c)は6.0~6.5%で、三大合併症予防範囲をキープ。糖尿病は血管の病気ですので、細小血管障害や動脈硬化に起因する病を防ぎ、今後も趣味の写真と健康維持に努めたい。

## 1. 卒寿を迎えて

平田哲郎会員

誕生日が全く同じ大正14年3月26日という機縁で結ばれた永島仁会員と私の両名が、この26日で揃って満90歳を迎えることとなり、3月4日の定例会で盛大に卒寿の祝福を受けた。一口に90年というが、両名共先の大戦で陸軍に招集され、支那大陸を転戦し辛うじて生還。その後の70年間も敗戦・復興の苦難の道を生き抜いてきたわけである。

しかし、最後の10年間(80歳代)は幸運にも多摩プロバスクラブに知己を得、素晴らしいプロバスライフにも恵まれ、揃って卒寿を祝うことができたのは、望外の喜びであった。

記念すべきこの機会に、たまたま私が10年間撮り貯めていたプロバス関係のビデオを、定例会で上映することが許され、卓話として発表した次第である。

今回は、時間の制約もあり、当クラブ発足後まだ日の浅い平成18年から、平成20年の創立5周年記念前後までの記録に絞って上映した。

この時期は当クラブが知名度の確立の為に対外的にも奔走した時期に当たり、右記の5点のビデオも、会員諸氏のクラブ外での懸命の活動状況を中心に編集したものである。

○当クラブの年間活動記録“プロバスライフの一こま”第5期岡野一馬会長当時(平成20～21年)のプロバスクラブ内外での年間活動状況をPR用として編集したものである。

○多摩プロバス寺子屋の“物作り教室”平成18年当時、クラブ外でのボランティア活動として、登坂征一郎会員の“モーター作り教室”を記録したものである。

○多摩プロバス寺子屋の“お作法教室”平成18年当時、小学校低学年を対象に“お座敷での作法(小西加葉子会員)”及び“初歩の礼法(滝川道子会員)”の指導状況を記録したものである。

○貝合わせの実技指導多摩中学のESD教育の一環である伝統文化の継承に“貝合わせ”が取り上げられ、吉岡喜久恵会員の実技指導の状況を記録したものである。

○タマピカル・サウンズの演奏平成18年8月の当クラブ納涼会に出演した、中村昭夫会員のタマピカルバンド演奏の一部を記録したものである。



平田哲郎会員



永島仁会員

## 2. 今、古典芸能がオモシロイ！ 青木ひとみ会員

古典芸能には様々なジャンルがありますが、私の専門の日本舞踊と長唄についてお話いたします。

舞踊も長唄も江戸時代に確立されました。舞踊は歌舞伎の間狂言として発達しました。

華やかな踊りで一息ついて、また物語に浸るのです。後に舞踊だけ独立して楽しむ作品も多くつくられるようになり、それが今日古典舞踊として残っています。長唄も同様に歌舞伎舞踊とともに発達しました。明治時代以降は純粋に舞踊、長唄としての作品が作られるようになりました。

日本舞踊は基本的には三味線音楽で踊ります。歌舞伎舞踊は江戸の風俗を写した舞踊や、歌舞伎の物語の登場人物が主人公の舞踊であるため、その知識がないと現代の人には解りにくいかもしれません。江戸時代にタイムスリップしたつもりで、非日常を楽しみながら、気軽に親しんでもらえると良いのではないのでしょうか。

舞踊は身体で様々な人物や森羅万象を表現します。歩き方ひとつで職業まで表現することができます。また扇で花が散ったり、雪を降らせたり、キセルで煙草を吸ったり、傘なども表現することができます。見る人にも想像力を働かせることを要求します。

古典芸能は知識・想像力・感性をフルに活用することで、最高のエンターテインメントになるのです。

5月10日12時からヴィータホールで多摩市日本舞踊連盟「春の会」が開催されますので、是非この機会にご覧いただければ幸いです。



◇◇◇ プロジェクト・委員会活動 ◇◇◇

1. 多摩プロバスかるた普及プロジェクト

大澤巨リーダー

1) 本年度計画の一つ「かるた作成プロジェクト活動報告書」が完成した。かるた製作の経緯をまとめたもので、創立10周年の記念事業として読み札の選定から絵札、解説文の作成まで会員の全員参加による手作りの成果であることを記している。平成27年5月13日発行A4版32頁(右図)、これを全員に配布する。



2) 唐木田菖蒲館が、毎年8月に行うワールドキャンバスで、かるたを紹介することになり、当クラブも、その準備に協力している。展示は7月中旬から8月中旬までの一か月間で、一般公開も行われる。

3) かるたの配布先用に「かるた利用の提案」と題する企画書を作成した。当面、市内小学校及びびコミセンを対象に配布する。

2. 屋形船からの花見

秋山正仁会員

3月31日正午より、晴天のもと桜花爛漫の隅田川を18名での屋形船の貸切で駒形橋から吾妻橋をUターンし、両国橋・永代橋・勝鬨橋をくぐり浜離宮庭園を右に見て大きくUターンし、対岸の桜と風景を眺めながら、飲み放題、天ぷらの食べ放題を大いに楽しんだ。この天気と満開の桜とスカイツリーとの出会いは一生の思い出になった。



江戸時代にも、太平の世を謳歌するように花見や花火、月見にと、舟遊びが盛んに行われ、有力大名や大商人は自前の船で、庶民も船宿や料亭が所有する船で料理やお酒、俳句に歌

に踊りに舟遊びを楽しんだ様です。

◇◇◇ サークル活動 ◇◇◇

1. 俳句会「私の一句」

登坂征一郎会員

俳句会は発足以来7年、「からまつ」主宰由利雪二先生と石川春兎先生のご指導のもと、毎月の句会で切磋琢磨し楽しんでおります。最近では主宰から進歩著しいとの評価を頂き、また、ここ数年、東京多摩ロータリークラブ主催の多摩市中学生俳句大会の一次選考にも携わり、若さに満ちた瑞々しさに接する機会を得、老骨に鞭打ち情緒豊かな句作(?)に励んでおります。「私の一句」に自句自解(句作の動機等)を添えて活動の一端を紹介させていただきます。

声かけてみな擦れ違ふ尾根の春 玄海

尾根縦走の思い出は麓に下り振返り見る踏破の満足感、尾根で擦れ違う人と交す「今日は頑張ってる」短い励の言葉。

山背負う花かたくりの前屈み 志水

早春の山に一人で山を背負っているような、健気でユーモラスな薄紫色のかたくりの姿を見ることが出来る。

兩岸の桜に軟声屋形船 虎子

天候に恵まれ暖かい春の日、船からの桜見物は初めて。川風に吹かれ、ほろ酔い気分で家族も一緒にと思いました。

被災地の早苗水面に葉を出しぬ 哇道

東日本大震災から3年、やっと田植が再開され、早苗が元気に顔を出してきた。溺れずに力強く、これからだ!

山寺の心頭滅却やや暑し 流馬

快晴の小春日和、塩山恵林寺参詣。暑い。汗をかく快川和尚の「火も又涼し」など到底凡人の及ぶ所ではない。

穂高岳七き友しのびケルン積む 雲海

ネパールのマカルーII峰頂上直下で岳友が高山病で倒れ、その葬送歌が彼の好きだった「穂高よさらば」でした。

秋の昼酒酌む羅漢教えけり 魚水

川越のうなぎ屋で酒を飲み、喜多院の酒好きの羅漢の多さを二人で数えて笑った。亡き友との思い出の句です。

星飛んで嫌いな理科が好きになる 胡桃子

一瞬の流れ星を見た。何故だろう。宇宙の神秘に触れたことで理科の時間が急に面白くなった。

万葉の古利に一つ曼珠沙華 爽風

万葉集に因んだ草花が賑わす古利。その庫裏の露地の静寂の中に、曼珠沙華が一本。凜として心を打つ。

今風が落した落葉踏んで行く 透水

紅葉した落葉樹はすっかり枯葉となり、今し方朝風に散った落葉を踏み鳴らす。林に踏みしむ音・風が心地よい。

冬めくやせり声変わる魚市場 秋霜

木の葉舞う季節になると鮫鱈・牡蠣・松葉蟹など鍋物が主流。競りの活気も一段と高まり、暫し聞き入った。

ぬくもりの残る手袋ひとつ借り 露枝

寒い朝、主人を駅まで送った際に思わず寒いと口から出てしまいました。片方の手袋をぬいで貸してくれました。

冬の虹何かいいことある予感 岳人

久しぶりに都心に出かけた時、冬だというのに虹が現れた。今日はきっといいことがありそうだ。そう思いたい。

元朝や閑居の鳥のもれる息 光花

万物を恐れず熟睡している冬鳥。無防備な姿にオーラを感じる。静寂な元日の朝、漏れる息遣いが愛しい。

**2. フレンチ風中華料理を楽しむ 増山敏夫会員**

リーダー不在で宙に浮いていたグルメサークルが、西村会員の「サークル活動を活性化しよう」との呼びかけで復活した。復活第一回は、西村会員のお世話で新装成った新宿中村屋で、人気メニュー「インドカレー」。二回目の今回は私が企画することになり、3月11日、交通費のかからない地元多摩センター京王プラザホテル、中華料理「南園」にしました。「ホテル開業25周年記念ランチ」と銘うつ、シェフが量より質、目にものを言わせた中華らしからぬメニューに、食べる事には目がない多摩プロ老々男女19名が挑戦。カラフルに春を気取ったフレンチ風(?)にプレゼンされた料理の数々、皆さん結構楽しいグルメだったようでした。会費2,500円を一割ほど超過し追加徴収させて頂き申し訳ありませんでした。西村会員に「ホテルは飲み物が高いんです!」と言われた通り、少々のもりの酒代が目論み違いで皆さんにご迷惑をおかけしました。反省!でも春はつい気が緩むもの、気持ちよく喉越しを楽しんだということでご勘弁を!今後のグルメは、食通粹人・阪東照子会員から案を頂き、次回は風流な「懐石屋御膳」、探訪した上で実施したいと思います。

**3. お茶を楽しむ会 瀬尾日出男会員**



3月17日に、関戸公民館第2学習室で、お薄とお菓子付きのお茶を楽しむ会が開かれ、14名が参加した。

当日は、阪東会員を講師とし、森川静子・小西加葉子両会員からもご指導を受けた。配布資料が少々難解だったが、話上手で声の大きい阪東講師のお蔭で、禅と関わりの深いお茶の由来を知り、有意義な一時だった。また、森川・小西両会員からは、お点前の心構え、菓子器の扱い、菓子の盛り方等、準備から後片付けまで具体的に教わり貴重な経験を得る良い機会であった。

**4. 歌を楽しむ会 瀬尾日出男会員**

3月18日、関戸つむぎ館にて、多少参加者が少なかったのが残念だったが、そこは皆の声量?でカバーしながら進めた。中村昭夫リーダーの心意気により、「野風僧」の男唱、「また君に恋してる」など、レパートリーを増やした。



**5. 出前講座「そろばん教室」 古澤靖雄会員**

10回目を迎えたそろばん教室が、無事終了した。スタート時から会員の心強いサポート、助言によりスムーズに授業が進められたことに改めてお礼と感謝を申し上げたい。



この10年を振り返ってみると、初期の数年は気負う気持ちに先にたち焦るばかりで、一人芝居を演じていたようだ。中期になると、対象校、生徒数がピーク時から減る傾向だったが、中期末には初年度並みとなり、今回は4校8クラス生徒数265名迄復活した。

今回の「そろばん教室」は無事終了したが、大きな課題が生じた。どのクラスにも理解度の高い子、低い子、そして軽度の障害をもった子がいるのが現状である。

2時限の持ち時間(90分)では所詮不可能だと思いつつも前向きに解決策を編み出さなければならない。これも私の責務だ。1回目を終えひと区切りかと思っていたが、この一年で解決策を編み出し、11回目への挑戦、闘争心を掻き立てつつ、子供たちのために次回もがんばろうと思う。

**6. 謝恩茶会 森川静子会員**

去る3月5日、卒業式の前日に都立府中工業高校茶道部主催謝恩茶会が実施されました。卒業生が毎年お世話になった先生方をお招きし、感謝の気持ちを込めて点前し、一服のお茶を差し上げる恒例の茶会です。今年のお客様(先生方)は11名で、卒業生3名と手伝いの在校生4名で行いました。

一般的には茶道部といえば女子生徒が中心のクラブですが、ここでは工業高校のため全員が男子生徒です。

道具は床の間に「山呼萬歳声」、膳所焼の鶴首の花入に紅梅と白玉椿をいれ、香合は松竹梅の絵付の扇面の京焼、水指は宝尽しの青交趾の茶巾袋、そして茶碗は「瑞雲」という銘の赤楽茶碗、どれもめでたい取り合せにしました。

毎年、卒業生を送る事は彼らが巣立つという事で喜ばしい事ではありますが、私にとっては一抹の寂しさを感じます。最後に顧問の先生と生徒と記念写真を撮り、その後、卒業生から感謝のお手紙と素敵なハンカチの思いがけないプレゼントを頂き感謝しました。



卒業生(前二人)とともに

**ライスカレーと純インド式カレー 西村政晃会員  
○ヒマラヤの麓で食べた香り高いカレー**

1971年8月から12月までの5カ月間、私はインド亜大陸の北部ネパールに滞在した。マカルーII峰(7,659m)の登山と学術調査を目的としたヒマラヤ遠征隊の一員として参加したものだ。

世界の屋根とよばれるヒマラヤの山登りも楽しかったが、それに劣らず行き帰りのキャラバンも興味深いものだった。東ネパールのピラトナガルを出発し、アルン河沿いにチベット国境のバルン氷河まで北上。登山の後、帰りは長駆カトマンズまで西進するという長いキャラバンだった。

見るもの、聞くもの、とても興味深かったが、なかでも毎日のように食べたカレーの味はいまでも忘れられない。夕食はほとんどカレー料理だった。

**○カレーは巡る—インドからイギリスを経て日本へ**

さて、カレーははるかインドからわが国へどのように伝わってきたのだろうか?—18世紀にイギリスへわたり英国風インド料理に変身。明治時代に洋食のカレーライスとして日本へ入ってきた、というのが正解だ。

先ずカレーがイギリスへ渡ったのは、18世紀にインド植民地を支配していた東インド会社の人たちが故国イギリスへ帰ってインドの味をしので、様々な香辛料を配合してカレー料理を作ったのが始まりという。イギリスから日本への渡来は明治の初期とみられる。カレーは急速に広まっていって明治30年代大衆の食べものとして定着したとみられる。

**○インド革命の志士と純インド式カレー**

前項でカレーライスの渡来はイギリスから洋食の一つ(小麦粉を使ったドロツとしたもの)として入ってき

たことを記した。

それではインドからふくいくたる汁状の香り高いカレーが直接わが国へ伝わったのは?—新宿中村屋の純インド式カレーにそのロマンに満ちた物語が秘められている。

インド革命の志士ラス・ビハリ・ボースはイギリスからインド独立を夢見て革命運動に挺身。時のインド総督ハーディング卿に爆弾を投げて、イギリスから追われる身となり大正4年日本へ亡命した。

イギリス政府はボースの国外退去を強硬に要求。日本政府も日英関係にヒビが入るのを恐れて、この要求を呑みこんでしまう破目となってしまった。それを知った新宿中村屋の創業者相馬愛蔵は、身を投げうってボースをかくまうことを決意。警視庁の執拗な探索にもめげず遂に大正11年の日英同盟解消まで、隠れ家を転々と変えさせながら匿いきったのである。その秘密連絡に当たったのが長女の俊子であった。俊子はそのボースに嫁いだ。この国をまたがる大きな事件の後年、昭和2年、新宿中村屋は食堂を開設。娘婿となったボースの意見を取り入れ、本場の純インド式カレーを発売した。

当時の思い出を相馬愛蔵はその著書「一商人として」(岩波書店)のなかでこう書いている。

「ボースは既にその妻を失っていたが、亡妻俊子は私の長女であった。英国政府の迫害のなかにあるインド志士の彼に嫁いだ俊子は心労の果てに若死したが、それ以来印度というものに対する我々の親愛の情はひとしおに深いわけであって、ボースのインド料理案が出るに及んで心動き、ちやうど店の新計画と一致して、いよいよ昭和2年6月喫茶部開設となり、同時に純インド式カレーを公開したのである。」



カレーライス



純インド式カレー

スペイン旅行記

大澤亘会員

今年の1月、8日間のスペインツアーに参加した。スペインは現在世界遺産が44(世界第3位)もあり、8日間ではあまりにも短い日数だったが、日本のテレビ各局が放映したこの国の世界遺産を、自分で録画したDVDが20枚以上もあり、その映像がこれを補った。

一昨年は地中海の東端トルコを訪ね、今回は西端のスペインを旅したのは、塩野七生の「ローマ人の物語」などの一連の著作によって、地中海を舞台とした歴史に興味を持ったためである。

1453年にコンスタンティノープルがオスマントルコに攻略されて、東ローマ帝国は建国以来1000年の歴史の幕を閉じてイスラム教国家に変わったが、多くのキリスト教の教会が破壊された中で、キリスト教時代の代表的寺院アヤ・ソフィアは破壊を免れ、イスラム教のモスクに改修された。現在では博物館となって世界各国からの観光客を迎えている。

一方、イベリア半島ではこの僅か39年後の1492年、キリスト教国連合軍がイスラムの最後の砦グラナダのアルハンブラ宮殿を奪回し、800年に及ぶイスラム支配が終った。しかしここでも多くのモスクが破壊された中で、この宮殿だけは一切破壊されずに国王の居城として使われ、いまやスペイン観光の目玉になっている。こうしてみると地中海はその歴史のなかで「美は剣よりも宗教よりも強い」ことを示しながら、あたかもキリスト教とイスラム教のバランスを取ったような感がある。

以下旅の思い出を簡単に綴ると

①最初の訪問地バルセロナでは、ガウディのサグラダ・ファミリアが着工後100年以上経った今も工事中で、未完成のまますでに観光客を受け入れていた。



夜の聖家族教会

②次のバレンシアへの途中のタラゴナでローマ時代の水道橋を見学。イスタンブールにも市内の大通りを跨ぐような水道橋があり、ローマ帝国の領土の広さを改めて実感した。

③バレンシアではこの地が発祥といわれるパエジャ(パエリア)を味わったが、お米が半なまで期待していただけにがっかり。

④次のラマンチャ地方ではなだらかに続く丘の上に建つ白い風車小屋群を見物。

⑤グラナダではフラメンコショーを見物し、翌日アルハンブラ宮殿を見学。広大な宮殿の中で水を大切にした、イスラム教徒の生活を垣間見る思いがした。



アルハンブラ宮殿内の噴水

⑥セビーリヤではスペイン一の規模を誇る大聖堂で、2トンの黄金で造られた祭壇の豪華さに「太陽の沈まぬ国」と謳われたこの国の往時のパワーを実感した。またこの地は「セビーリヤの理髪師」や「カルメン」のほか「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」「フィデリオ」の舞台でもあり、オペラファンとして訪ねてみたかった場所であった。



セビリア大聖堂の祭壇

⑦コルドバではイスラム教の寺院にキリスト教の教会を増築し、両宗教共存の寺院として知られたメスキータで、寺院を支える800本の円柱が壮観であった。



メスキータ

⑧最後の日に訪れたマドリッドのプラダ美術館では、入館していきなりあのベラスケスの門外不出の名作「ラス・メニーナス」の前に案内され、テレビで見慣れたこの名画の実物の大きさに圧倒された。今回の旅行で最も印象深い瞬間だった。

幻の絵「黒い目の女」

澤雄二会員

私の一品は、今、私の手元のない幻の一枚の絵画「黒い目の女」である。それは私の母にとって永遠に忘れることのできない絵画である。母は大阪市都島区で4百年続いていた料亭の二女として誕生。料亭の敷地は、戦後大阪市に寄贈され、現在「桜の宮公園」として市民の憩いの場となっている。女学校時代はスキーマの回転選手として活躍、国体で準優勝の成績を残した。また母は、幼少の頃より洋画家・美術評論家として名高い斎藤与里に師事し絵画を学んだ。女学校卒業後パリに留学。当時のパリには、藤田嗣治・岡鹿之助・猪熊弦一郎ら錚々たる画家が腕を磨いていた。うら若い母は彼らに可愛がられ、様々な画法を学んだようだ。「藤田に一寸手を入れてもらおうと絵が別物のように変わるのが不思議だった」と話してくれた。

右の写真は、サロン・ドートンヌで入選した絵であるが、これも藤田が手を入れた作品である。



その頃著名な詩人アンドレ・サルモンの知己を得、彼の紹介で日本でも人気のあるマリー・ローランサンに弟子入りした。彼女のアトリエでの様子や、よく連れて行ってもらった日本料理屋の話折にふれ語っていたのを思い出す。第二次大戦でドイツの敗色が濃くなるとパリの日本人は中立国へ脱出した。母も準備していたある日、マリー・ローランサンが「和子、お別れの日が来たわね、これを記念に」と言って一枚の絵を渡してくれた。包みの新聞紙を開くと女性が描いてあった。「それ貴女よ」彼女が日本人女性を描いたのはこの一枚のはずである。大切に持ち帰ったこの絵は、戦後のどさくさ時に行方不明となった。知る人も少ないこのエピソードを

出品を報道した新聞記事



教えてくれるのは、70年近く前の新聞記事である。芦屋で開かれた美術展に出品した時の記事である。私と母は、記事の写真を手掛かりに懸命に行方を捜したが見つけられなかった。7年前には、テレビ番組「お宝なんでも鑑定団」に出演し呼びかけたが出てくることはなかった。

父が多額の借金を残して他界後、母と5歳の私は夜逃げ同然に上京。貧しい中、母は苦勞を重ねて私を育ててくれた。大学生の時、母は銀座の松屋で個展を開いた。その後、スケッチ旅行で世界中を回り、大阪と東京のデパートで毎年個展を開き、画家としての人生を全うした。私の本当の一品は、「母・澤和子」だと思っている。

◆◆◆ ハッピーバースデー ◆◆◆

1. 3月誕生日を迎えられました！



左から  
小西加葉子  
岡野一馬  
永島仁  
平田哲郎  
の各会員

2. 4月誕生日を迎えられました！



左から  
澤雄二  
神谷真一  
大澤巨  
の各会員

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

夏めく日、花冷えの日と天候不順。当クラブは勿論のこと、読んでくださる他のクラブの皆様共に健やかなことと存じます。お陰さまで、本日ニュース 60号を発行することができました。毎回快く寄稿して下さる会員の力によるところ大です。有難く感謝致しております。

60という数に因み、考え付くことは、論語に「齢60歳になると、他人の行動を素直に受け止め理解できる歳となり、『耳順』という」とあります。これを知り、自覚して今後の編集に当たらねばと感じています。また60周年としてダイヤモンド婚が上げられます。苦楽を共にして迎える祝賀の節目です。このニュースも、来し方10年を経て委員間の絆が深まり、ダイヤモンドとまではいなくも、各々の持ち場で輝いているつもりです。

青山更に緑まし一歩ずつ初夏に。我々も確実な一歩を、これから先も踏み出して参ります。

(広報委員 阪東熙子記)